

【課題番号】 4-1804

【研究課題名】 世界自然遺産のための沖縄・奄美における森林生態系管理手法の開発

【研究期間】 平成30年度～平成32年度

【研究代表者（所属機関）】 小高信彦 （森林研究・整備機構 森林総合研究所）

研究の全体概要

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産推薦地における遺産の顕著で普遍的な価値（OUV）を維持するためには、OUVを代表する固有種の絶滅リスクを域内保全により回避するための、森林生態系管理手法の確立が必須である。本研究では、（１）固有種保全のための計画立案と順応的管理のためのモニタリング体制の確立、（２）固有種が依存する原生的な老齢林の機能評価と機能維持のための技術開発、（３）二次林における生態系機能評価と老齢林の機能強化のための自然再生に関する研究、（４）外来哺乳類のインパクト評価、防除対策の効果の評価、有効な対策を実現するための合意形成に利用できる科学的データの提供とその評価手法に関する研究を行う。以上の研究成果を通じて、**世界自然遺産の包括的管理計画の活動主体に森林生態系の管理手法とガイドラインを受け渡すことを最終目標とする。**

オキナワトゲネズミについては推進費【4-1503】「奄美・琉球における森林地帯の絶滅危惧種・生物多様性保全に関する研究」で開発した技術を用いて、個体群回復のためのモニタリング体制を確立する。また、ルリカケスやオーストンオオアカゲラ、アカヒゲなど、OUVを代表する固有種で十分な調査が実施されていない種のモニタリング手法の開発を行う。原生的な老齢林に依存するヤンバルテナゴガネの樹洞木や、オキナワセッコクの着生木を単木レベルで記録して継続観察することにより、台風影響や密猟・盗掘インパクトの評価が可能な体制を確立する。老齢林の機能評価では、未調査の北部訓練場返還地の現状を明らかにするとともに、LiDARや衛星画像等のリモートセンシングデータを用いた老齢林の特徴や、台風インパクトの評価を実施する。二次林においては、コアエリアとなる老齢林の機能強化を念頭に、若齢二次林やリュウキュウマツ人工造林地において、堅果生産や樹洞生産等の、固有種の生息に影響を与える生態系機能評価を行うとともに、自然再生手法の提案を目標とする。外来種については、世界的に注目されているマングース（フイリマングース）対策事業に加え、イヌやネコを対象として、外来種のインパクト、対策の効果（外来種減少と固有種の回復）を定量的に評価し、外来種対策の必要性の科学的根拠を提示し、事業推進のための合意形成に必要な情報を提供する。

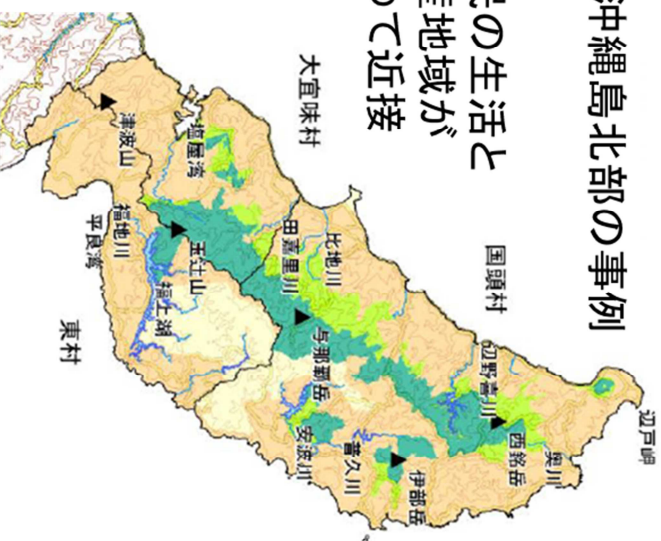
以上に基づき、推薦地におけるOUVの維持管理・強化のための多様な主体の共同・参画による「包括的管理計画」の実現に寄与する。

【4-1804】世界自然遺産のための沖縄・奄美における森林生態系管理手法の開発

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」
世界自然遺産推薦区域図（日本政府 2017年）

沖縄島北部の事例

住民の生活と
遺産地域が
極めて近接



凡例
 推奨地
 緩衝地帯
 周辺地域
 OUV保全のための
 「包括的管理計画」
 の立案と実践
 成果の受け渡し

OUV: 世界遺産としての顕著で普遍的な価値

